

優秀賞

今、私にできること

長野県 長野市立三陽中学校三年 伊藤 立夏

二〇二四年一月一日、能登半島地震が発生した。生徒会で行った能登半島地震募金では、十八万二千円を集めることができた。

募金最終日の放課後、集まったお金を数えていると、募金箱の中に一枚の紙が入っているのを見つけた。それは、被災地に向けた、送り主の名前が書かれていない手紙だった。

「被災者の皆様が一日でも早く、元の生活に戻れること、(中略) わずかですが私のお年玉が少しでもお役に立てば幸いです。お身体には気をつけて下さい」。私は、この手紙を覚えてしまうほど何度も読み返した。長々と書かれているわけではない。本当に伝えたいことだけを綴っているのに、この災害で深く傷ついていることが、被災者の方々を心配する気持ちが、痛いほど伝わった。私は、この人と同じくらい、被災者の方々のことを思っていただろう

か。温かいこたつでおせちを食べながら「かわいそう」「大変そう」。こんな軽い言葉で片付けてしまっていたのではないか。どこか他人事だと思ってしまうのではないか。自分の考えや行動がどれだけ浅はかで、被災した方々に対して、震災に胸を痛めている人に対して、苦しんでいる人を助けようとして現地で頑張っている人に対して失礼だったのか、気がつくことができた。そして震源が違えば自分に起こっていたかもしれないことを、他人事と捉えていたことに恐怖すら覚えた。

手紙を読んだ日から、能登半島地震のニュースを今まで以上に意識するようになった。寒い体育館で何日も過ごしている人がたくさんいるのに。今も見つかっていない人だっているのに。何もできない自分の無力さを痛感していた。

そんなある日、「能登のものを買って復興の応援

をしよう」という取り組みがあることをテレビで知った。私でも被災地のためにできることがあるということがうれしかった。このテレビを見て、

「私たちも能登のものを買ってみようか。」

と言い出したのは私より母の方が先だった。「被災地のために何かできることをしたい」と思っていたのは、私だけではないことを知り、またうれしくなった。

私は、あの手紙を読んで、震災で胸を痛めている人がたくさんいることを知り、自分の心の中の「他人事」に気がついた。だからこそ自分にできることを見つけることができた。

被災した方々の本当の痛みや、苦しみは、私たちにはわからない。しかし、痛みや苦しみを「知ろうとする」ことはできるのではないか。ニュースにいつもよりも耳を傾けること、家族や友人と、震災について話してみることで、こんな小さなことからでも新しい気づきはたくさんあると思う。

「知ろうとすること」は、気づきと行動を生み、他人事という意識をなくす。そして誰かを救う、第一歩になるのではないだろうか。

